

Title	親への同一視についての発達的研究：同一視の内容における変化を中心に
Author	小西 勝一郎, 粕井 みづほ, 三谷 英津子
Citation	大阪市立大学生活科学部紀要, 27巻, p.225-235.
Issue Date	1980-03
ISSN	0385-8642
Type	Departmental Bulletins Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学生活科学部
Description	
DOI	

Placed on: Osaka City University

親への同一視についての発達的研究

—同一視の内容における変化を中心に—

小西勝一郎・柏井みづほ・三谷英津子

A Study on the Development of Parental Identification

—Changes in Some Aspects of Parental Identification—

KATSUICHIRO KONISHI, MIZUHO KASUI, AND ETSUKO MITANI

序　　論

子どもの人格形成にとって、親子関係は最も普遍的で基本的な人間関係である。この力動的な親子関係において親への同一視は重要な役割を持つと考えられ、すでに多くの研究がなされているが、なお検討の余地も多い。

親子関係においても親の性別、子の性別、年令の違いがあり、その相互の関係も変化してゆくが、それに伴ない親同一視も発達的に変化してゆく。従来の研究によると、幼児期までは男女共に母への同一視が大きいとされているが、その後の発達的変化は男子と女子とで異っており、一致した見解はでていない。また、従来の研究は特に幼少期の発達の面について多いが、思春期以降青年期のかなり幅広い年令について組織的に調べたものはそれほど多くはない。われわれも先の研究¹⁾で3才児から小学校6年生までを対象として同一視の面から子どもの親に対する認知について発達的に検討したが、その後の思春期以降の変化については調べていない。この時期は子供の世界が拡大し、親の他にモデルが多く出現する時期でもあり、それだけにまた親への同一視も重要であり、かつ変化が見られるであろう。しかし、幼少期の親への同一視がこの時期においてどのような意味を持ち、またどのように変化してゆくのだろうか？この点についての検討の余地は少なくないと思われる。従って、この研究では親への同一視の発達的変化について調べることをまず第1の目的としてとりあげた。（目的1）

また、Mussenら²⁾は親への同一視の一般的傾向として、「親が養育的で力を持っているとみられると子どもはある程度両方の親と同一視する。しかし、子どもは異性の親より同性の親へと類似性をより大きく知覚しているから、同一視は父と息子、母と娘との間により強くなる

傾向がある」と述べている。一連の研究^{3), 4), 5), 6), 7)}において同性の親への同一視の重要性を示すと考えられる結果が得られているが、Bronson⁸⁾はじめ他の研究^{9), 10)}が示しているように、青年期になると必ずしも同様であるとは言えないようである。そこで、発達的傾向にあわせて、第2に同性の親への同一視の傾向があるのかどうかを吟味することにした。（目的2）

なお、同一視の測定方法も多様であるが、方法の違いによって必ずしも同じ結果が得られているとは限らない。Bieriら¹¹⁾は質問法、SD法、TAT法を用いて同一視の測定方法間の関連性を検討したが、三者各々の間に一部だけ有意な関連を見出している。竹林¹²⁾およびわれわれも^{6), 7), 13)} Bieriらに準じて質問法とSD法との関連について調べたが、有意な関連は見出していない。この点については調査方法の適・不適ということも考えられるが、必ずしもそうではなく、むしろ、質問法は比較的意識的な面をSD法は意識以下の面を測定しており、共にそれぞれ特有な意味があると考えられないだろうか。従って、発達的には前者は大きい変化がみられようし、後者では変化はそう大きくなく、いわば幼少期の基本的な親への同一視傾向を示すと言えるのではあるまいか。本研究では、この点をさらに発達的な変化にあわせて明らかにする。（目的3）

さて、先のBieriらの研究では同一視を類似性(similarity)の面と親密性(involution)の面から捉えている。一般に同一視の測定については質問法では類似を問題とするが、さらにそれを強化する要因として愛情、養育とか権威、力の要因も含めて測定することが行なわれている。これらの内容面での発達的変化を調べたわれわれの研究¹⁴⁾でも内容によって必ずしも同じ傾向を示すとは言えなかった。SD法もいくつかの因子にわけられるが、全

体としての同一視傾向だけでなく、これらの因子によっても発達的变化の差異が生ずるとも考えられるであろう。そこで、この点から発達的变化の状況を検討し、親同一視の発達に関連する内容、因子はどれかを明らかにしようとした。(目的4)

調査方法

I. 調査対象

伊丹市内のK小学校5年生、T中学校3年生、I高等学校2年生、ならびに奈良市内のN女子大学1回生、合わせて432名について調査を実施した。その内訳は第1表の通りである。なお、欠損家庭のものや回答の不完全なものは除いてある。

対象となったK小学校は空港に近接した国道沿いに位置し、騒音がかなり大きい。父親の職業としてはサラリーマンが大半を占めている。T中学校は住宅地域にあり、父親の8~9割がサラリーマンもしくは商店主であり、ごく一部の人が農業を営んでいる。母親の職業については、何らかの仕事を持っている人が63%あり(1977年、T中学での調査による)、年々増加の傾向にある。その内訳は、フルタイムが約50%、パートタイムは約10%、残り2~3%が自営である。I高校も飛行機の空路の下にあり、騒音が大きい。父親の職業はサラリーマンが多く、母親の約40~50%が常勤・パートを含めて何らかの仕事を持っている。大学生については上述の小中高校生と異なり出身地は近畿を中心に散在しており、選択の働いていることもやむをえなかった。

表-1 調査対象(人)

学年	性別	男	女	計
小 5		67	78	145
中 3		64	55	119
高 2		57	58	110
大 学		—	58	58
計		188	244	432

II. 調査手続

研究の目的に従い、直接的な方法である質問法と間接的な方法であるSD法の二方法によって親への同一視を測定した。質問法はわれわれの研究^{1), 14)}から同一視にとって必須の要因と考えられる類似・好み(親密)・尊敬(権威)の三領域について「はい—いいえ」の五段階の直線上に×印をつけさせた。質問は①あなたはお父さん(お母さん)に考え方、感じ方、行動のしかたが似ていますか。⑤あなたはお父さん(お母さん)を好きですか。⑦あなたはお

父さん(お母さん)を尊敬していますか。とした。類似の他に好みと尊敬の質問を加えたのは、両者が同一視を強化する要因として大きい意味を持つと考えたからである。回答の整理にあたっては、「はい」が5点で「いいえ」が1点になるように段階毎に1~5点の得点を与えた。そして、三領域並びに総得点についてこれらの得点を各項目毎に集計し、平均を出して親への同一視得点としたが、各々の得点が高い程、親への同一視が大きいものと仮定した。

次に、Schaeffer¹⁵⁾に準じ、間接的な方法であるSD法を実施した。これは、相反する意味を持つ14対の形容詞を示し、7段階の直線上に自己、父、母それぞれの評価をさせた。この尺度(scale)はMasculinity factor(男子性、女子性の因子)、Potency factor(潜在性の因子)、Activity factor(活動性の因子)、Evaluative factor(評価の因子)から構成されている(以下、Masculinity, Potency, Activity, Evaluationと略す)。このうち Potency, Activity, EvaluationはOsgood¹⁶⁾により抽出された3つの主要な次元である。各因子は以下の如きとなる。

Masculinity—男性的—女性的、はげしい—やさしい、大きい—小さい、強い—弱い

Potency—大きい—小さい、強い—弱い、かたい—やわらかい、重い—軽い

Activity—活動的—受身的、速い—遅い、鋭い—鈍い、熱い—冷たい

Evaluation—良い—悪い、楽しい—悲しい、賢い—おろか、親切—不親切

回答の整理にあたっては、直線上に1~7点の得点を与え、4因子と総得点毎に合計して父の得点、母の得点子の得点を求める。そして父、母の得点と子の得点との差の絶対値を各々父同一視得点、母同一視得点とした。また、同性の親への同一視傾向を調べるために、父同一視得点から母同一視得点を引いた差を求め、父母相対的同一視得点とした。ここで、父同一視、母同一視は得点が高い程小さく、ゼロに近い程同一視が大きいと考える。父母相対的同一視得点は得点が正のときは母へ、負のときは父へより同一視が大きく、ゼロは父母同じに同一視すると考える。

III. 調査期間・場所

昭和53年9月1日より30日までの間にK小学校、T中学校、I高等学校、N女子大の各教室において、教師の指示のもとに集団的におこなった。

結果と考察

I. 質問法による結果について

表-2 質問法による親同一視

同一視	性別	年齢	総得点	類似	好み	尊敬
父 同一 視	男	小5	1190(1.84)	819(0.95)	488(0.90)	427(0.82)
	男	中8	983(2.64)	805(0.97)	358(1.07)	358(1.02)
	男	高2	911(5.10)	261(1.04)	387(1.98)	311(1.14)
	女	小5	1142(2.08)	814(0.89)	422(0.81)	408(1.04)
母 同一 視	女	中8	1049(2.77)	295(0.97)	326(1.11)	347(1.23)
	女	高2	1021(2.86)	291(0.96)	358(1.19)	357(1.02)
	女	大学	1058(2.58)	810(1.01)	388(0.98)	376(0.97)
	男	小5	1158(2.02)	801(0.98)	430(0.75)	428(0.78)
母 同一 視	男	中8	988(2.88)	278(0.86)	377(0.90)	380(0.96)
	男	高2	968(2.76)	284(1.09)	368(1.01)	352(1.06)
	女	小5	1212(2.26)	888(0.95)	448(0.93)	454(0.81)
	女	中8	1138(2.16)	818(0.98)	427(0.84)	384(0.97)
	女	高2	1094(1.98)	815(0.88)	408(0.77)	375(0.89)
	女	大学	1209(1.99)	852(0.98)	447(0.70)	405(0.88)

注) 数字は平均、()内の数字は標準偏差である。

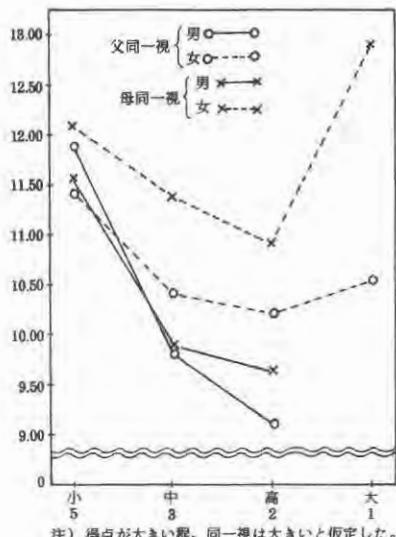
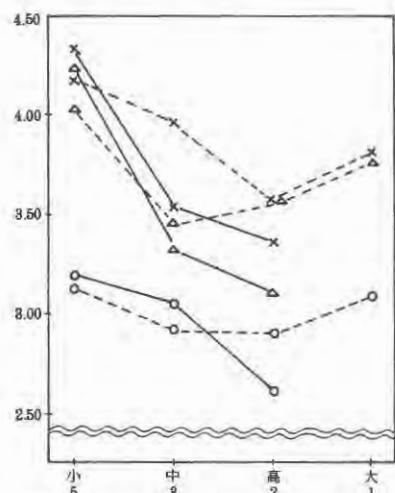


図-1 質問法による親同一視(総得点)

質問法による場合の親同一視については、第2表に示すような結果が得られた。この結果に基づき、各学年間の有意差をコクラン・コックス法によりt検定した。(以下、全て同法を用いた。)

1. 父同一視について

まず、男子の父同一視については、総得点をみると、小5が最も父同一視が大きく、中学、高校と小さくなっている。小5と中3とでは、中3の方が父同一視が有意に小さく($t_0=5.0555$, $df=129$, $<.001$), 小5より



注) 類似 男○—○ 好み 男×—× 尊敬 男△—△

注) 好み (女○—○), 尊敬 (女×—×), 好み (女○—○), 尊敬 (女×—×)

注) 得点が大きい程、同一視は大きいと仮定した。

図-2 質問法による父同一視(三領域)

高2の方が有意に小さく($t_0=5.8349$, $df=122$, $<.001$), 発達につれて父同一視が減少する傾向を示している。

内容ごとにみても、類似、好み、尊敬の各内容共、父同一視は発達につれて減少する傾向をみせている。特に類似においては、父同一視は中3より高2の方が有意に小さく($t_0=2.3776$, $df=119$, $<.01$), 小5より高2の方が有意に小さい($t_0=3.2213$, $df=122$, $<.01$)。好みでは小5より中3の方が($t_0=4.5848$, $df=129$, $<.001$), また、小5より高2の方が($t_0=5.2765$, $df=122$, $<.001$)有意に父同一視が小さい。尊敬においても、小5より中3の方が($t_0=5.7525$, $df=129$, $<.001$), 小5より高2の方が($t_0=6.3477$, $df=122$, $<.001$)有意に小さい。

一方、女子の父同一視については、総得点において、女子は小5より中2の方が有意に父同一視が小さく($t_0=2.2907$, $df=131$, $<.05$), 小5より高2($t_0=2.6188$, $df=129$, $<.02$), 小5より大1($t_0=2.1683$, $df=134$, $<.05$)もまた有意に小さい。すなわち、発達につれて減少する傾向がある。

内容別にみると、類似においては有意な差はない。好みにおいて父同一視は発達につれて減少を示すようであり、中3より高2で減少の傾向($t_0=1.6986$, $df=106$, $<.1$)がみられる。小5より高2($t_0=3.3847$, $df=129$, $<.01$), 小5より大1($t_0=2.4486$, $df=134$, $<.02$), 中3より大1($t_0=2.5105$, $df=111$, $<.02$)の方が父同一視は有意に小さい。尊敬においては小5が父

同一視が一番大きく、中3の方が有意に小さく ($to=2.7305, df=131, <.01$)、中3と高2の差は有意ではないが、小5より高2の方が有意に小さい ($to=2.4927, df=129, <.02$)。そして、中3より大1の方が有意に大きい ($to=2.0379, df=111, <.05$) ことが注目される。すなわち、小5から高3までは父同一視は発達につれて減少するが、大1で再び増加する傾向を示している。女子は大学生で母から父へと同一視を転換させるという Bieri¹⁷⁾ の研究もあることから、この傾向は青年期女子の父同一視の特徴を示すものとも考えられる。

父同一視について男女を比較してみると、男子の父同一視は発達につれて減少し、女子では高2までは減少し大1で増加の傾向がある。そして、総得点では高2で女子の方が男子より父同一視が大きい傾向があり ($to=1.9180, df=108, <.01$)、中3で好み ($to=2.1239, df=117, <.05$)、高2で尊敬 ($to=2.2128, df=108, <.05$) において女子の方が男子よりも父同一視が大きい。このことが先の父同一視の減少の傾向と関連しているとも考えられ、年長になるに従っての女子の同一視の優位性を示している。

2. 母同一視について

まず、男子の母同一視についてみると、総得点で小5より中3の方が有意に小さく ($to=3.9109, df=129, <.001$)、小5より高2も有意に小さく ($to=4.3949, df=122, <.001$)、小学生と中学生の間での同一視の減少を示している。

内容別にみると、類似においては有意な差は見られず、

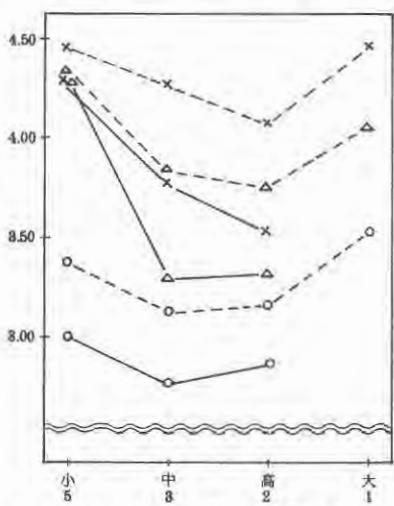


図-3 質問法による母同一視(三領域)

好みで小5より中3の方が有意に小さく ($to=3.8982, df=129, <.001$)、小5より高2の方も有意に小さく ($to=4.7090, df=122, <.001$)、母同一視は発達につれての減少を示している。尊敬においても小5より中3の方が有意に小さく ($to=6.3147, df=129, <.001$)、小5より高2の方が有意に小さく ($to=5.6233, df=122, <.001$)、発達につれての母同一視の減少を示している。

一方、女子の母同一視についてみると、総得点で、小5より中3の方が小さい傾向があり ($to=1.8935, df=131, <.01$)、小5より高2の方が有意に小さい ($to=3.1344, df=129, <.01$)が、中3より大1の方が大きい傾向があり ($to=1.7983, df=111, <.01$)、高2より大1の方が有意に大きい ($to=3.0214, df=109, <.01$)。すなわち、小5から高2へとは発達につれて母同一視は減少しているが、高2から大1へとは逆に増加している。

内容別にみると、類似においては、小5より中3の方が有意に小さく ($to=2.2790, df=131, <.05$) 減少しているが、中3より大1の方が ($to=3.1339, df=111, <.01$)、高2より大1の方が ($to=2.1338, df=109, <.05$) 有意に大きく、やはり高校から大学へと増加している。好みでは、小5より高2の方が有意に小さく ($to=2.6588, df=129, <.01$)、高2より大1の方が有意に大きくなっている ($to=2.7578, df=109, <.01$)、小5から高2へと減少、そして高2から大1へと増加の傾向がある。尊敬では、小5より中3の方が ($to=3.1042, df=131, <.01$) また小5より高2の方が ($to=3.8282, df=129, <.001$) 有意に小さく、逆に高2から大1へは増加の傾向がある ($to=1.7672, df=109, <.01$)。すなわち、小5から高2へとは減少し、大1で再び増加している。但し、大きな増加ではないため小5より大1の方が母同一視は小さい ($to=1.9505, df=134, <.01$) ようである。

上述の女子の父同一視においても高2より大1の方が父同一視が大きい傾向があることを指摘した。父同一視の場合には尊敬の領域でのみ見られたのであるが、母同一視においては、総得点、類似、好み、尊敬の全てにおいて増加が見られ、また、その増加の割合も大きいことは興味深い。ところで、男子に関しては、大学生では父同一視がより大きい傾向があるという Bieri¹⁷⁾ らの研究もあるがここでは明らかにできなかった。

母同一視について男女を比較してみると、総得点において、中3 ($to=3.2461, df=117, <.01$) および高2 ($to=2.8557, df=108, <.01$) で女子の方が男子よりも有意に大きい。また、類似においては小5 ($to=2.2827$)

$df=143, <.05$), 中3 ($to=3.1882, df=117, <.01$) で女子の方が男子より大きく, 好みにおいても中3 ($to=3.1053, df=117, <.01$), 高2 ($to=3.1959, df=108, <.01$) で女子の方が男子より大きく, 尊敬では中3 ($to=3.0162, df=117, <.01$), 高2 ($to=2.3011, df=108, <.05$) でやはり女子の方が男子よりも大きい。父同一視, 母同一視共に女子の優位性を示しているが, 残り母同一視で顕著である。この傾向は従来の研究結果^{6) 7) 18)}を再確認するものであろう。

以上, 親同一視の発達的変化についてまとめると, 男子では父同一視, 母同一視共に総得点並びに各領域で発達につれて減少し, 一方, 女子では父同一視, 母同一視共に高2までは発達的に減少するが, 高2から大1へとは再び増加している。はじめに仮定したように, これらの発達にともなう親同一視の減少傾向はその精神発達にともない他の有力なモデルが生じてきたとも考えられるが, 男子にくらべ女子において再び変化がみられるることは興味深いところである。

3. 父同一視と母同一視について

男女各々の父同一視, 母同一視の得点の差をみると, 男子においては父同一視と母同一視の得点の差は全く有意ではない。女子では, 小5で類似 ($to=1.7820, df=152, <.01$) と好み ($to=1.8379, df=152, <.01$) において母同一視の方が父同一視より大きい傾向があり, 尊敬においては母同一視の方が父同一視より有意に大きい ($to=2.0501, df=152, <.05$)。中3では, 総得点で母同一視の方が父同一視より有意に大きい ($to=2.0311, df=106, <.05$), 尊敬で母同一視の方が父同一視が父同一視より大きい傾向がある ($to=1.8085, df=106, <.01$)。また, 高2では, 好みにおいて母同一視の方が父同一視より有意に大きい ($to=2.5192, df=102, <.02$), 大1では総得点 ($to=3.6268, df=112, <.001$), 類似 ($to=2.2892, df=112, <.05$), 好み ($to=3.9768, df=112, <.001$)において母同一視の方が父同一視より有意に大きい。同性の親への同一視傾向は, 男子では見られないが, 女子では各学年毎に見られ, 残り大1ではその傾向が著しい。このことは既述の女子が大1において親同一視が再び増加する傾向があり, 特に母同一視では顕著であることと関連する。

4. 同性の親同一視と異性の親同一視

同性の親同一視と異性の親同一視とを比較してみた場合, 男子の同性の親同一視(父同一視), 女子の同性の親同一視(母同一視)共に総得点及び三領域全てにおいて発達的変化が見られる。一方, 男子の異性の親同一視(母同一視), 女子の異性の親同一視(父同一視)共に総得点と

好み, 尊敬の領域での発達的変化がみられるが, 類似では有意な差はみられない。自分と同性であり, 故に外観, 行動の面でより類似性が多い方の親についての認知は発達的に変化するが, 他方の異性の親についての認知の変化は乏しいことを示すといえそうである。

5. 各内容における変化

親への同一視といつても, 内容により変化があるものとそうでないものとがあるから, ここで各々の内容による検討を試みた。すなわち, 父同一視, 母同一視共に, 男女を問わず好み, 尊敬では類似に比べて同一視が大きい傾向がある。好み, 尊敬はむしろ同一視に働く要因というようなものであろうが, これらのより主観的評価を要求される内容において同一視が高いことは基本的な情緒的結びつきの重要性を再確認させる。また, 前述のように異性の親同一視ではこれらの好み, 尊敬での変化があり, 類似での変化はないが, 同性の親同一視では好み, 尊敬, 類似の三内容で変化があることは, 子供による親の認知の相違を表わしているものとして興味深い。

II. SD法による結果について

SD法による場合の親同一視については, 表3, 4, 5に示すような結果が得られた。

1. 父同一視について

まず, 男子の父同一視についてみると, 総得点では各学年間に有意な差は見られず, 因子毎にも有意な差はない。

表-3 SD法による父同一視

性別	年齢	父同一視	Masculinity	Patency	Activity	Evaluation
男	小5	1655(841)	472(811)	584(370)	454(370)	472(882)
	中3	1763(824)	556(369)	620(411)	484(591)	486(829)
	高2	1792(842)	486(565)	506(311)	811(829)	485(869)
女	小5	2188(1069)	822(404)	635(428)	585(434)	477(827)
	中3	2055(825)	712(249)	607(827)	582(546)	481(851)
	高2	1880(287)	626(580)	625(504)	496(554)	482(268)
	大学	1267(949)	866(880)	586(886)	558(279)	408(825)

注) 数字は平均, ()内の数字は標準偏差である。

表-4 SD法による母同一視

性別	年齢	母同一視	Masculinity	Patency	Activity	Evaluation
男	小5	2215(820)	954(437)	588(888)	456(823)	492(298)
	中3	1669(624)	689(385)	481(424)	619(242)	406(201)
	高2	1968(1016)	745(451)	618(431)	532(339)	484(255)
女	小5	1651(897)	496(287)	891(280)	426(368)	508(869)
	中3	1725(755)	465(270)	889(276)	535(388)	488(251)
	高2	1474(755)	482(288)	440(240)	440(213)	440(285)
	大学	1786(935)	524(980)	498(522)	591(876)	488(343)

注) 数字は平均, ()内の数字は標準偏差である。

表-5 SD法による父母相対的同一視

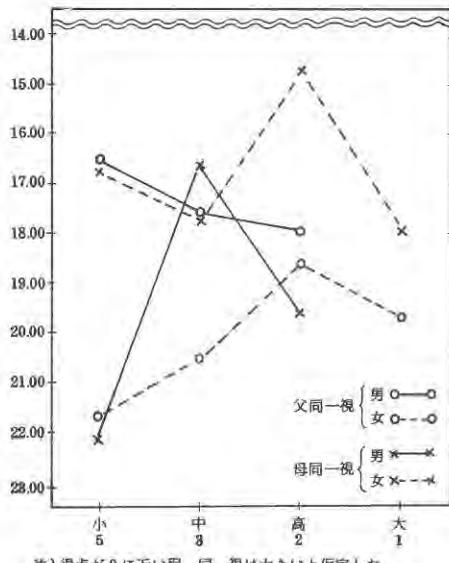
性別	年齢	父同一視	Masculinity	Potency	Activity	Evaluation
男	小5	-5.24(8.84)	-4.60(4.77)	+0.28(4.05)	+0.06(9.96)	+0.06(2.65)
	中3	+0.75(7.50)	+0.09(4.04)	+1.55(3.42)	+0.58(9.56)	+0.82(3.60)
	高2	-1.61(8.72)	-2.47(5.27)	-0.79(5.50)	-0.06(8.49)	+1.05(3.45)
女	小5	+5.08(8.81)	+8.88(4.17)	+2.25(3.91)	+0.88(3.27)	-0.88(3.22)
	中3	+8.44(9.40)	+2.81(3.85)	+2.45(4.42)	-0.25(8.73)	-0.09(3.51)
	高2	+8.89(6.82)	+1.79(2.97)	+1.57(2.97)	+0.77(8.81)	+0.82(2.85)
	大1	+1.40(8.81)	+1.10(8.81)	-0.59(4.66)	-0.24(2.78)	

注) 数字は平均。()内の数字は標準偏差である。

い。ただ、Potencyで中3より高2の方が同一視が大きい傾向がある($t=1.7320$, $df=119$, <0.1)。

女子の父同一視では、総得点で小5より高2の方が同一視が有意に大きい($t=2.4190$, $df=129$, $<.05$)、質問法とは逆に発達につれて同一視は増加している。この傾向はわれわれの予想に反するものであるが、Brodbeck⁹⁾の結果と一致している。さらに、少女においては男子性役割価値は年令がますます増すというTuddenham¹⁹⁾の研究や12-15才で少女の性役割価値は男子性役割の好みに変化するというWebb²⁰⁾の研究などがあり、性役割との関連を示唆される。

因子別には、Masculinityで小5より中3の方が同一が大きい($t=3.0788$, $df=131$, $<.01$)、小5より高2($t=3.9164$, $df=129$, $<.001$)、小5より大1($t=3.2838$, $df=134$, $<.01$)の方が大きい。すなわち、父同一視は発達につれて大きくなる。Potencyでは、中

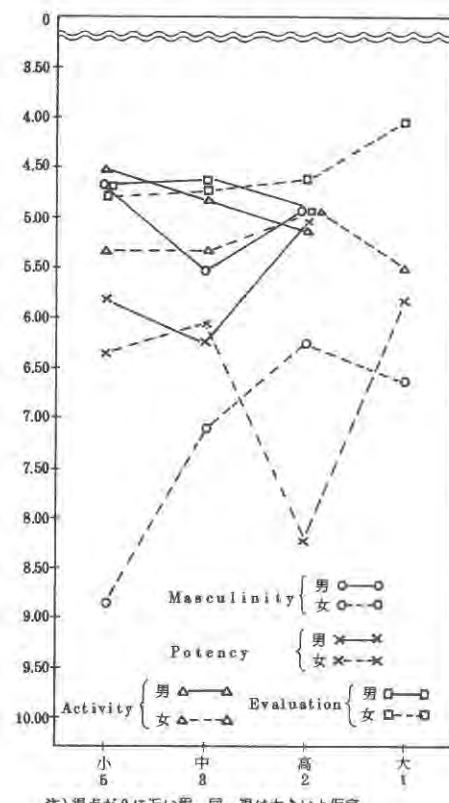


注) 得点が0に近い程、同一視は大きいと仮定した。

図-4 SD法による親同一視(総得点)

3より高2の方が同一視が小さく($t=3.5564$, $df=106$, $<.001$)、小5より高2の方が小さい($t=2.9669$, $df=129$, $<.01$)。また、高2より大1の方が父同一視が大きい($t=3.7786$, $df=109$, $<.001$)なっており、高校までは発達につれて父同一視は減少し、大学で再び増加している。他のActivity, Evaluationの因子では有意な差はなかった。Potencyの傾向が必ずしも全体の傾向とは一致しない点は更に検討の余地がある。

ここで男女を比較してみると、父同一視は総得点で小5($t=3.0518$, $df=113$, $<.01$)、中3($t=3.3585$, $df=117$, $<.01$)、高2($t=7.8651$, $df=108$, $<.001$)共に男子の方が女子より同一視が大きい。因子別にみるとActivity, Evaluationでは大きな差はないが、Masculinityにおいて小5($t=6.9477$, $df=143$, $<.001$)、中3($t=7.6868$, $df=117$, $<.001$)、高2($t=13.4161$, $df=108$, $<.001$)共にやはり男子の方が女子より父同一視が大きい。Potencyにおいても中3($t=2.8854$, $df=117$, $<.01$)、高2($t=3.2940$, $df=108$, $<.001$)共に男子の方が女子より父同一視が大きい。すなわち、父同一視において男子優位の傾向がある。



注) 得点が0に近い程、同一視は大きいと仮定

図-5 SD法による父同一視(四因子)

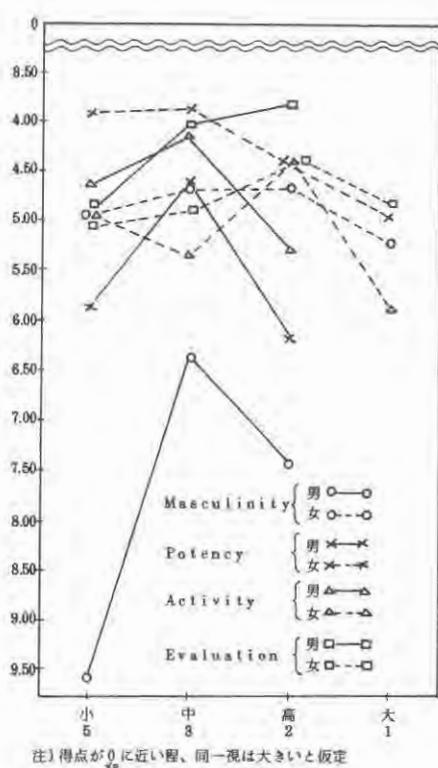


図-6 SD法による母同一視(四因子)

2. 母同一視について

まず、男子の母同一視について見ると、総得点で小5より中3の方が有意に大きい($t_0=4.2676, df=129, <.001$)が中3より高2の方が小さくなる傾向もあり($t_0=1.8740, df=119, <.01$)、小学校から中学校での母同一視の増加、そして高校での減少がある。発達的変化についての研究ではないがわれわれの以前の研究⁵⁾でも類似した傾向があり、思春期男子の特徴とも考えられ、さらに問題にすべきであろう。

因子別には、Masculinityで小5より中3の方が母同一視が大きい($t_0=4.9127, df=129, <.001$)、小5より高2の方が大きい($t_0=2.6780, df=122, <.02$)。Potencyでは小5より中3の方が母同一視が大きい($t_0=2.0365, df=129, <.05$)が中3から高2では逆に小さい($t_0=2.2240, df=119, <.05$)。Activityでは中3より高2の方が母同一視は小さい($t_0=2.0736, df=119, <.05$)。そして、Evaluationでは小5より高2の方が母同一視が大きい($t_0=2.0614, df=122, <.05$)、小5より中3の方が大きい傾向がある($t_0=1.9743, df=129, <.01$)。これらの因子毎の傾向は全て総得点の傾向にほぼ一致している。

一方、女子についてみると、総得点では中3より高2の方が母同一視が大きい($t_0=2.0519, df=106, <.05$)、高2より大1では逆に有意ではないが小さくなる傾向がある($t_0=1.9806, df=109, <.01$)。すなわち、小学校から高校では母同一視は発達につれて増加し、大学で減少する。

因子別に見るとMasculinity, Activity, Evaluationでは有意な差はない。Potencyでは大きな変化はないが、小学生と大学生とを比べると小5の方が大1より母同一視が大きい($t_0=2.0088, df=134, <.05$)、総得点での傾向にほぼ一致している。

ここで男女を比較してみると、総得点で小5($t_0=3.7172, df=143, <.001$)、高2($t_0=2.8521, df=108, <.01$)共に女子の方が男子よりも母同一視が大きい。因子別にみると、Masculinityにおいて小5($t_0=7.5250, df=143, <.001$)、中3($t_0=3.2728, df=117, <.01$)、高2($t_0=4.0828, df=108, <.001$)共に女子の方が男子よりも母同一視が大きい。Potencyにおいて小5($t_0=3.4605, df=143, <.001$)、高2($t_0=2.6759, df=108, <.02$)共に女子の方が男子よりも母同一視が大きい。Activityにおいては他の因子とは逆に中3で女子の方が男子よりも母同一視が小さい($t_0=2.1422, df=117, <.05$)がEvaluationでは差はみられない。すなわち、例外はあるが全体として母同一視での女子優位の傾向がある。先の質問法では父同一視、母同一視共に女子優位であり、SD法による結果とは異なっていることについては注意する必要がある。

3. 同性の親同一視と異性の親同一視

男女共に同性の親同一視ではあまり顕著な変化は見られないが異性の親同一視の場合にかなりの変化が見られることは、子にとっての各々の親の重要性の相違を示すものと言えそうであるが、どのような機能的相違があるのかについてはさらに検討しなければならない。

4. 父母相対的な同一視

父母相対的にみると、まず男子では総得点において小5では父よりも、中3でわずかに母よりも、高2で父よりもの同一視となっている。このうち小5と中3の差は有意であり($t_0=4.2931, df=129, <.001$)、高2で再び父よりもなっても小5よりもその傾向は小さい($t_0=2.4019, df=122, <.05$)。全体としては父同一視優位と言える。

因子別にみるとMasculinityにおいては小5では父よりも、中3でわずかに母よりも、高2で父よりもの同一視である。このうち小5と中3の差($t_0=6.8078, df=129, <.001$)、中3と高2の差($t_0=3.6367, df=119, <.001$)共に有意であり、高2で再び父よりもなっても小5よりも

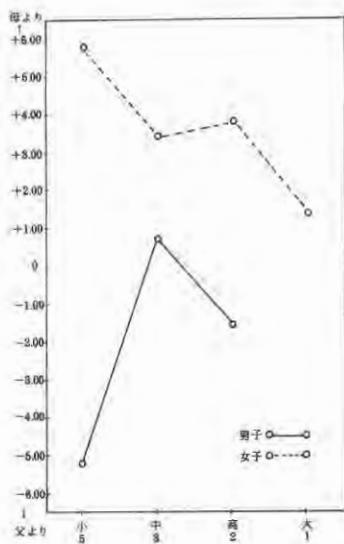


図-7 SD法による父母相対的同一視(総得点)

もその傾向は小さい($to=2.3231, df=122, <.05$)。すなわち、親同一視は父よりの傾向と考えられる。Potencyでは小5、中3で母より、高2で父よりの同一視となっている。このうち小5より中3の方がより母よりの傾向があり($to=1.8819, df=129, <0.1$)、中3と高2の差は有意である($to=0.5824, df=119, <.001$)。Activityでは小5、中3とわずかに母よりで、高2でわずかに父よりの同一視であるが大きな変化はなく、全体としては父母に等しい同一視である。Evaluationでは小5、中3、高2と母よりの同一視であり、小5より高2の方が母よりの傾向がある($to=1.7530, df=122, <0.1$)が大きな変化はない。

全体の傾向と各因子の傾向は必ずしも一致していないが基本的には同性の親への同一視傾向がある。因子では主にMasculinityとPotencyが男子の親同一視に関連しているようである。

一方、女子では総得点において小5から大1まで母よりの同一視であるが、学生が上がる毎に母よりの傾向が小さくなっている、小5と大1の差は有意である($to=2.2816, df=134, <.05$)。

因子別にみると、Activityではわずかに小5で母より、中3でわずかに父より、高2で母より、大1で父よりの同一視であるが大きな変化はない。Evaluationも小5、中3でわずかに父より、高2で母より、大1で再び父よりの同一視であるが大きな変化はなく有意な差もない。Masculinityでは小5から大1まで母よりの同一視であるが、学年が上がる毎に母よりの傾向が小さくなっている。

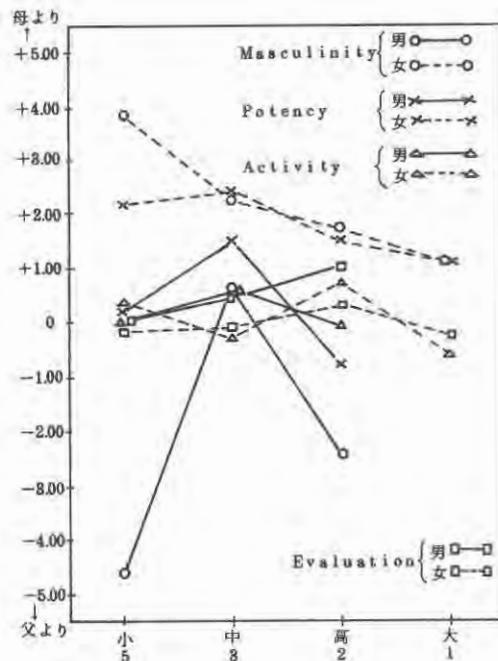


図-8 SD法による父母相対的同一視(四因子)

り、小5より中3($to=2.2839, df=131, <.05$)、小5より高2($to=3.3235, df=129, <.01$)、小5より大1($to=4.0105, df=134, <.001$)の方が母よりの傾向が小さい。そして、中3の方が大1よりも母よりの傾向がある($to=1.7088, df=111, <0.1$)。Potencyにおいては小5から大1まで母よりであるが、やはり学年が上がる毎に母よりの傾向が小さくなっている。有意ではないが、中3の方が大1よりも母よりの傾向がある($to=1.7194, df=111, <0.1$)。すなわち、Activity、Evaluationでは父母にはほぼ等しく同一視する傾向であるが、総得点及びMasculinity、Potencyでは母への、すなわち同性の親への同一視傾向がある。

男女を比べてみた場合、総得点、Masculinity、Potencyでは女子は母より、男子は父よりの同一視にはっきり分かれている。Activity、Evaluationにおいては男女の差は見られず発達的な変化もない。総得点では小5($to=7.1870, df=143, <.001$)、高2($to=3.5982, df=108, <.001$)で男子は父より、女子は母よりであり、中3では有意ではないが同じ傾向がある($to=1.6978, df=117, <0.1$)。Masculinityでは小5($to=11.2264, df=143, <.001$)、中3($to=2.2779, df=117, <.05$)、高2($to=5.2217, df=108, <.001$)で男子は父より女子は母よりの同一視と顕著な差がある。Potencyにおいては小5($to=2.9164, df=143, <.01$)、

高2 ($t_{0.05/2} = 3.7325$, $df = 108$, $p < .001$) で男子は父より、女子は母よりと有意な差がある。質問法の場合にも女子の同性の親同一視の傾向があったが、SD法の場合は発達につれて減少するとはいえやはり男女共に同性の親同一視の傾向が著しいといえよう。

5. 各因子における変化

以上因子別に検討した場合には一口には言えない傾向があったが、とりわけ同一視の発達的变化に大きい影響を与えるのはMasculinityのようである。女子の父同一視、男子の母同一視、女子、男子での父母相対的同一視での変化や、男子の父同一視が女子よりも高い事、女子の母同一視が男子よりも高い事、男子の父より、女子の母よりの同一視の傾向などにMasculinityが関係しているようである。また、Potencyも男子、女子の父同一視、母同一視、父母相対的同一視での変化や男女間の同一視得点の違いに影響を与えているよう無視できないが、特にMasculinityの因子が注目される。親同一視と性役割との概念は必ずしも同じと考えられないが、密接な関連があることが示唆されたからである。なお、Potencyが影響を与える点についてはMasculinityとPotencyの尺度が重複していることによるかもしれないが、さらに検討の必要があろう。

III. 質問法とSD法による結果について

Bieriら¹⁰は前述のように親同一視の測定方法間の関連を検討し、その結果、類似性について質問法とSD法との間に一部有意な関連を見出している。SD法は本来同一視の類似性の面を測定するものであるから、ここで、は両測定法間の関連を明らかにするためSD法の父同一視得点、母同一視得点と質問法の類似の父得点、母得点との χ^2 検定を試みた(表は省略)。その結果、SD法と質問法との間に有意な関連を認めなかった。また、SD法の各因子と質問法の各領域との関連は、母同一視において高2の女子の類似とActivityとの間に有意な関連が見られた($\chi^2 = 6.84$, $df = 1$, $p < 0.01$)だけであった。竹林¹²やわれわれの研究^{6, 7, 13}においてもSD法と質問法との間に有意な関連を見出しており、既述のようにSD法と質問法との結果における親同一視の発達的に矛盾した傾向があることなどを合わせ考えると、質問法とSD法との相関が見られないということは、必ずしも調査方法の問題だけによるものではないのであるまい。

この研究において見出した質問法とSD法による結果の相違についてみると、まず親同一視の発達的变化での相違があげられる。既述のように男子の父同一視は質問法の場合には発達につれて減少しているが、SD法の場合には顕著な傾向はない。女子の父同一視は質問法では発

達につれて減少し大学で再び増加するが、SD法ではこれと逆に発達につれて増加する傾向がある。男子の母同一視は質問法では発達につれて減少するが、SD法では小5から中3へと増加し、中3から高2で再び減少している。女子の母同一視は質問法では高校までは減少し大学で再び増加するが、SD法ではこれと逆に高校までは増加し大学で再び減少している。すなわち、男女共に質問法の場合親同一視は発達につれて減少するのに対して、SD法の場合親同一視は発達的に増加する。(但し、女子では大学で再増加または再減少がある。)同一視のモデルは親から他の人々に分化し拡大してゆくのが正常な姿のようであるが、それは直接的意識的な同一視の面を測定する質問法の結果によりあてはまるようであり、しかしモデルとしての親の影響は人生における最初の基本的なものであり、またそれは子供の生涯を通じて支配的な要素として継続するものもあるとそれは間接的な言わば基本的な同一視の結果によりあてはまるようでもある。質問法による場合の親同一視の減少の理由として同一視の対象の拡大や、自我意識の昂揚による親への反抗が考えられ、SD法ではこのより内在的で基本的な親への同一視傾向が残存して現われると考えられまいか。

なお、われわれは初めに従来の研究から同性の親への同一視傾向を仮定した。質問法では男子では顕著に見られず、女子では同性の親への同一視傾向が大きい。SD法では男女共に同性の親への同一視傾向がある。男女を比較すると、質問法では父同一視、母同一視共に女子の方が男子より大きく、SD法では父同一視は男子、母同一視は女子の方が大きい。この結果はわれわれの先の研究^{6, 7)}と一致しており、先の研究ではその理由として「同性の親同一視の優位の要因」と「同一視の女子優位の要因」¹⁸⁾をとりあげたが、この際にも測定方法の違いとその特性を考慮することが重要と思われる。

要 約

小、中、高、大学生を対象に、親への同一視を質問法とSD法によって調べ、その発達的な変化の傾向と同性の親同一視の傾向及び両調査法の関連そして測定される内容における変化について検討した。その結果、次のことが見出された。

1. 質問法について

男子の父同一視、母同一視、女子の父同一視、母同一視共に高校まで発達につれて減少する。但し、女子の父同一視、母同一視は大学で再び増加する。

同性の親への同一視傾向は男子では見られないが、女子では顕著である。また、女子の母同一視、父同一視の

方が男子の父同一視、母同一視より大きい。

内容ごとにみるとやはり全体の発達的傾向にあわせて同様の変化をしていると言えるが、好み、尊敬は類似に比べて同一視が大きい傾向がある。また、好み、尊敬は同性の親同一視、異性の親同一視共に全体と同じような変化をするが、類似は同性の親同一視においてのみ変化し、異性の親同一視では変化はない。

2. S D法について

男子の父同一視は大きな変化はなく、母同一視においては小学校から中学校へと増加、高校で減少する。女子の父同一視は発達につれて増加し、母同一視は高校までは増加、大学で減少する。すなわち、仮定に反し大きな変化があり、また、質問法とは異なる傾向を示している。

同性の親への同一視の傾向が男女共にあるが、女子では発達の方向として相対的に異性の親への同一視が大きくなる傾向がある。

因子による変化の傾向は一概には言えないが、Masculinity及びPotencyが大きい影響を与えており、性役割との関連も示唆された。

3. 質問法と S D法について

質問法類似と S D法の結果の間には有意な関連はない。質問法の各領域と S D法の各因子との間には、高2女子の母同一視において類似とActivityとの間に有意な関連がある以外は相関はない。

質問法と S D法では発達的な変化に違いがあり、若干の考察がなされたが、さらに検討してゆく必要がある。

文 献

- 1) 小西勝一郎、山本 久：幼児と小学生の親の認知について—親への同一視の面から—、本紀要、15, 165-172 (1967)
- 2) Mussen, P.H., Conger, J.J. & Kagan, J.: *Child Development and Personality*, Harper & Row (1963)
- 3) Gray, S.W. & Klaus, R.: The assessment of parental identification, *Genet. Psychol. Monogr.*, 54, 87-116 (1956)
- 4) Emmerich, W.: Parental identification in young children, *Genet. Psychol. Monogr.*, 60, 257-308 (1959)
- 5) 小西勝一郎、西田さち子：親への同一視と親の態度、子の性格との関連、本紀要、19, 41-46 (1971)
- 6) 山本みづほ：親への同一視について—親の態度及び子の性格との関連—、本学部生活福祉学専攻修士論文、(1978)

- 7) 小西勝一郎、山本みづほ：親への同一視について—親の態度、子の性格との関連—、本紀要、26, 179-191 (1978)
- 8) Bronson, W.C.: Dimensions of ego and infantile identification, *J. Pers.*, 27, 532-545 (1959)
- 9) Brodbeck, A.J.: Learning theory and identification: IV. Oedipal motivation as a determinant of conscious development, *J. Genet. Psychol.*, 84, 219-227 (1954)
- 10) Heilbrum, A.B.: Sex differences in identification learning, *J. Genet. Psychol.*, 106, 185-193 (1965)
- 11) Bieri, J. & Lobeck, R.: A comparison of direct, indirect, and fantasy measures of identification, *J. abnorm. Soc. Psychol.*, 58, 253-258 (1959)
- 12) 竹林佐知子：きょうだいの地位と親への同一視、成績について—ひとりっ子を中心として—、本学児童学専攻卒業論文 (1968)
- 13) 小西勝一郎：非行少年の父母に対する認知、補導センターからみた少年、大阪府青少年補導センター (1968)
- 14) 小西勝一郎、浜井和子：テスト不安と親子関係について、本紀要、17, 167-173 (1969)
- 15) Schaeffer, D.L.: Blacky the cat, I: Semantic differential ratings, *J. Proj. Tech. Pers. Assessm.*, 32-6, 542-549 (1968)
- 16) Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, R.H.: *The measurement of meaning*, Urbana, Ill. Univ. of Illinois Press (1975)
- 17) Bieri, J. & Lobeck, R.: Self-concept differences in relation to identification, religion, and social class, *J. abnorm. soc. Psychol.*, 62, 94-98 (1961)
- 18) 八重島建二：人格形成過程の力学に関する研究—親同一視の位相体制について—、神戸大学教養部人文学会論集、8, 31-77 (1970)
- 19) Tuddenham, R.D.: Studies in reputation: I. Sex and grade differences in school children's evaluations of their peers. II. The diagnosis of social adjustment, *Psychol. Monogr.*, 66 (Whole No. 333) (1952)
- 20) Webb, A.P.: Sex-role preferences and adjustment in early adolescents, *Child Developm.*, 34, 609-618 (1963)

Summary

This study has attempted to explore the developmental changes of parental identification by direct measure (questionnaire technique) and indirect measure (semantic differential technique), the tendency that both males and females identify with same sex parent, relationships of these two measures and changes in some aspects of parental identification.

Subjects were 188 males and 244 females at different ages from fifth grade to university. The results were as follows:

1. There were significant developmental changes in two measures but males father-identification in semantic differential.
2. There was the tendency that both males and females identified with their same sex parents.
3. There was no significant relationships between two measures but one, and there were differences between the developmental changes of the two.
4. There were differences among changes in some aspects of parental identification. It was suggested that Masculinity factor and Potency factor influenced on development of parental identification.